

改訂版同調志向尺度の開発 (1)

○藤川真子¹・井川純一²・中西大輔³

(¹ 広島修道大学大学院人文科学研究科・² 東北学院大学人間科学部・³ 広島修道大学健康科学部)

目的

本研究の目的は、同調志向尺度 (横田・中西, 2011) の改訂版を作成することである。Deutsch & Gerard (1955) によれば、多数派を模倣する同調の動機には、規範的影響と情報的影響による2つがある。これらの動機を測定する尺度として横田・中西 (2011) が開発した同調志向尺度が存在する。だが、この尺度を用いた研究 (e.g., Fujikawa et al, 2024) では、特に情報的影響による同調を正確に測定することが困難であった。よって本研究では、新たに作成する改訂版同調志向尺度は2因子構造になるという仮説を立て、予備調査を実施した。また、本研究は OSF で事前登録 (<https://osf.io/xe3cm>) を行った。

方法

分析対象者 クラウドワークスの一般人311名 (男性141名, 女性168名, その他2名) であった。平均年齢は40.64±9.24歳であった。回答の指示に従っていなかった1名は分析から除外した。

手続き QualtricsXM フォームで作成されたフォーム上で、改訂版同調志向尺度への回答を5件 (1. 当てはまらない-5. 当てはまる) で求めた。

結果

分析にはHADとRを使用した。まず、スクリープロット基準において、適切な因子数が2であることを確認した。また、補助的にMAP/BIC基準も用いた。その後、規範的影響項目13項目と情報的影響項目13項目に対して探索的因子分析 (最尤法プロマックス回転) を実施した。因子負荷量が.40以下の項目やどちらの因子にも同程度の因子負荷量となった項目を削除するために、複数回の探索的因子分析を実施した。3回行った結果、規範的影響13項目と情報的影響7項目から構成された2つの因子が選定された (Table)。また、 α 係数はどちらも十分な内的整合性が確認されたことから、仮説は支持された。

Table

改訂版同調志向尺度の項目および α 係数

規範的影響項目 ($\alpha = .94$)

1. 場を乱さないように、いろいろと人に合わせてしまうことが多い
2. たとえ納得できなくても、しかたなく周りにあわせてしまうことが多い
3. 自分の主張を押し通して場を乱すぐらいなら、何も言わない方が、気が楽である
4. 周囲の反応が気になってしまって、本心と違うことでも、周りの人に合わせて同意してしまうことがよくある
5. グループの基準やルールに従いがちである
6. みんなの中でなかなか自分が出せないと思うことがよくある
7. 気まずい思いをしないため、自分の判断よりも、他者の判断を気にしてしまう
8. たとえ自分の信じていないことであっても、グループ全体の意見に賛成する
9. 仲間の中で自分だけ意見が違っても気にならない (*)
10. しばしば、他の人から自分の考えを受け入れてもらえるか不安になり、周囲の意見を参考にすることがある
11. 周りの考えがどうであろうと、自分の考えを押し通すほうだ (*)
12. 空気を読んで、他の友人に合わせることの方が多い
13. みんなが同じ意見だとしても、違う意見を主張することをためらわないだろう (*)

情報的影響項目 ($\alpha = .78$)

1. 多くの人が支持している飲食店はサービスや味がよいと判断できる
2. 多数派の回答と自分の回答が一致しない場合には、自分が間違っている場合が多いと思う
3. 正しい情報を得ようとするときには、グループに従うよりも一人で判断する (*)
4. 多数派と同じ意見であれば、正しい判断ができる
5. 観光地でご飯を食べる時には、行列店を選ぶ
6. 多数派の意見だからといって正しいとは限らないため、慎重に考える (*)
7. 売れ筋の商品は、思わず購入してしまうことがある

注) アスタリスク (*) は逆転項目を示す。

考察

本研究では、改訂版同調志向尺度をするために、予備調査を実施した。探索的因子分析の結果、規範的影響13項目と情報的影響項目7項目で構成された改訂版同調志向尺度が開発された。ただし、この尺度の信頼性・妥当性に関しては検討が不十分である。よって、今後の研究においては、再検査信頼性や同調に関連する他の尺度との関連を通じた構成概念妥当性を検討する必要がある。

謝辞

横田晋大先生 (広島修道大学) に分析などの助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。